

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2006年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	文学研究科日本文学専攻・教授		小峯 和明 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ 人文		<b>個人・共同の別</b>	個人 ・ 共同 名	
<b>研究課題名</b>	他界訪問譚の研究—日本における目連救母伝説の変遷—				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・日本文学専攻・前期三年		山口 好美 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
<b>研究期間</b>	2006 年度				
<b>研究経費</b>	200 千円				

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

ひとは死の世界をいかに捉え、生きてゆくのか。生死の境を越えて往還する物語にひそむ信仰や他界観を＜目連救母説話＞によって考える。

目連救母説話の多くは、説話集に盂蘭盆会の起源譚として語られてきた。それが十六世紀にはお伽草子となり、さらに近世には説経、そして近世末以降には盆踊り歌となり永く継承された。文字として残るだけでなく、また絵画や唱導などとも関係深いものであった。その中でお伽草子に、新たに独自の記述が現れるのは特徴的で、中世には、目連救母説話は他の説話の要素を取り込み、再創造されていた様子が伺われる。お伽草子を中心として、日本における目連救母説話の諸相を捉えなおす。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 目連 ] [ 盂蘭盆 ] [ 往還 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、日本における目連救母説話を調査し、お伽草子『もくれんのさうし』を中心として、その展開を分析した。『もくれんのさうし』は目連救母説話の一つでありながら、従来それほど省みられないものであった。しかし、今回調査を進める中で、『もくれんのさうし』の重要性を見出し、その成立が日本の目連救母説話が語られた背景をも明らかにするものと思われた。以下では、まず説話集等に見られる目連救母説話を整理し、その特徴を述べる。次に、説話の絵画化や盆行事との関連などを含め『もくれんのさうし』とその周辺との関わりを捉える。また、今回得られた近世以降への展開をも視野におさめ報告する。

## 【1】説話集の目連救母説話

目連救母説話の初例とされる『三教指帰』では、ごく短い記述の中で、目連は幼名の羅ト(らぼく)という名前で登場し、死後の苦しみにいる母を救ったことが記される。この羅トという名前は、七世紀に作られたと考えられる『浄土孟蘭盆経』という経典によって示された。本来、目連救母説話が説かれた『孟蘭盆経』には出家前の目連の話は語られないが、『浄土孟蘭盆経』や敦煌で発見された目連の「変文」など、民衆にむけた語り物のなかでは、話が脚色され、地獄におちる母の罪深さ(慳貪さ)が強調されてゆく。『三教指帰』が何に拠ったから明らかでないが、『孟蘭盆経』以外の典拠をもつ記述として重要と考えられる。そして、日本の多くの説話集に見られる目連救母説話にもこの傾向があり、『注好選』中巻第三十二・三十三や、『宝物集』巻一などで、目連の母が「青提女」という名前で呼ばれていることなど変文以来の中国の目連救母説話の影響が見られる。

また、注目すべき点として、目連救母説話は孟蘭盆会の起源譚としてばかりでなく、むしろ、死んだ後も苦しむ母を追いかけて救済し供養する<孝養>の物語として受容されていたらしいことである。『孟蘭盆経』に、餓鬼道の母を追いかけ救済することを「乳哺の恩」に報いるというが、目連による亡母供養は一種の孝子譚の意味を持って語られてきた。たとえば、『孝養集』上巻第十一には、孝養の一つとして救母説話が挙げられ、それに続いて『孟蘭盆経』を踏まえて目連に言及している箇所がある。また、『中外抄』では盆拝の仕方についてのやり取りがあり、その最後に「孟蘭盆は親のためなり」といっている。孟蘭盆会という行事は目連救母説話を伴って、子の孝養として行なわれるものであったことがわかる。

今回、愛知県西尾市岩瀬文庫を訪れ、孟蘭盆に関する資料を数点調査した。その中のひとつ『孟蘭盆献供儀』(元禄三年<1690>)では、目連の救母を孝養・孝順と書いて繰り返し、冒頭で「孟蘭盆と云はこれ仏弟子の孝を申、恩を報ずる法なり」と孟蘭盆会の縁起として語っている。目連救母説話は先祖供養の孟蘭盆会の起源譚でありながら、母親へのみの報恩を説くものとして語られてきた。それが特に強調されるようになる背景に、母性尊重思想の強まりがあったことはすでに指摘されている。おそらく、目連の救母というモチーフによって、母子の結びつきが定型化していたようだ。

これに加え、『三国伝記』以降の説話では、母の生前の物語と、新たに目連の地獄めぐりのモチーフが拡大してゆく。それまでの説話が、『孟蘭盆経』を典拠とする姿勢をもつものに対し、『三国伝記』は中国で作られた『目連救母経』という経典に拠っており、その内容に地獄めぐりが含まれ、これが以後、お伽草子、説経、さらには『目連尊者地獄めぐり』という盆踊りの起源譚へ引き継がれることになる。また、次に述べるように、目連救母説話の絵画化については、主に六道絵を舞台とするが、地獄への関心の高まりと、目連の地獄めぐりが結びついたことによるものと考えられる。出光美術館本『六道絵』には、目連と母の地獄の再会場面と、二十四孝の孟宗・郭巨・老萊子が描かれている。『三教指帰』以来の主に説話集等に見られる日本の目連救母説話を追ってゆくと、『三国伝記』の所伝成立あたりに、目連救母説話が多様化してゆく状況が推察される。

## 【2】『もくれんのさうし』とその周辺

『もくれんのさうし』は天理大学図書館蔵本のものが唯一の伝本である。奥書によれば、享禄四年(1531)に書写された。目連が死後の母を救済し、孟蘭盆会を催したという根幹はかわらないが、その内容はそれまでの目連救母説話のパターンとはかなり異なるものである。『三国伝記』は画期の作品であったが、『目連救母経』の翻訳といわれるほどその関係が深くオリジナリティに乏しかった。しかし、『もくれんのさうし』は目連の蘇生譚や、結末では地獄の炎に焼かれた目連の袈裟が中国から

**研究成果の概要 つづき**

日本に渡り、宇治の宝蔵に収められた話など、救母説話に直接関わらない話題が盛り込まれ、その伝統のみで読み解くことはできないものとなっている。

また『もくれんのさうし』はそれまでの説話より密接な親子愛を描き出す。『孟蘭盆経』以来、目連の母は慳貪故に死後苦しみを受ける存在として語られてきた。しかし、『もくれんのさうし』では、母は我が子可愛さに他人を蹴落とすことを願ったという罪を負い、目連尊者の誕生についても、彼の出家は母の意志によってなされる。一方で、目連は故郷の母を強く思い修行の日々を過ごした様子が描写される。救母するに至るまでの物語を、母の罪深さという点ではなく、子が地獄までも追いかけてゆく「愛情」を強調するものとして変えてしまったのである。

さらに興味深いのは、『もくれんのさうし』に新たに現れた仏伝との関係である。『もくれんのさうし』には、目連の出自に関する記述など、いくつか仏伝の影響を読み取ることができる。仏伝とは、釈迦の一代記であるが中世には経典などと異なる仏伝が数多く語られた。中世仏伝と呼ばれるそれらの特徴に、釈迦と摩耶の親子愛を謳う点が注目されている。本文レベルの関係のみならず、仏伝の語られた唱導世界と『もくれんのさうし』成立背景との関わりが明らかにされるべきである。目連救母説話の多様化を促したのは、語りの世界であったと考えられる。

それには絵解きも大きな役割を担った。たとえば、目連救母説話は六道絵や熊野観心十界図、立山曼荼羅に地獄での母との再会場面が絵画化される。その内、極楽寺本『六道絵』が『三国伝記』の内容とほぼ同じ場面を描いていることが明らかにされている。また、『目連救母経』を絵巻に仕立てたと推測される『目連尊者絵』がかつて存在していたことも知られている。昨年八月、京都で六道詣りを調査した際、六道珍皇寺、西福寺などで境内に熊野観心十界図が掛けられていた。両寺以外の熊野観心十界図諸本をも調べたところ、そのほとんどで獄卒によって鉢の先に貫かれた人と対面する僧が描かれていた。これは目連と母の再会場面と解されている。この構図は他に立山曼荼羅にもあることが知られているが、『箱根権現縁起絵巻』下巻第八にも、血の池地獄と思われる池のそばにこの三者が描かれていることを発見した。箱根も立山同様、山岳信仰の地であり興味深い。目連救母説話の広がり、絵解きの影響力はかなり大きかったものと思われる。『もくれんのさうし』をめぐる未だ研究が少ない。今回得られた唱導との関係という新たな視点を今後さらに発展させる必要がある。

**【3】近世以降への展開**

近世、目連救母説話は説経節に語られた。17世紀後の八文字屋本『目連記』と鱗形屋本『目蓮記』の二つが現存する。『もくれんのさうし』に続き、近世の目連救母説話も、ここでさらに新たな物語を加える。両本は全六段の構成のうち、初段・二段はほぼ同じ内容を持ち、これが後半の救母説話と繋がりがたい。八文字屋本の三段目以降の本文は『もくれんのさうし』と語句・表現が一致する箇所が多く、ほとんど同じと見てよいことは指摘されてきたが、それ以上の関係は論じられていない。今回、前半部を考察した中で

説経がそれまでの目連救母説話、特に『もくれんのさうし』に特徴的に現れた母子愛の物語に父親を登場させ、息子と父の関係性を父母子の家族の問題に広げようとする新たな創作があった可能性を見出した。

また、説経とお伽草子の関係で重要なのは、母親の描かれた方の違いである。八文字屋本は『もくれんのさうし』と同様に子思いの母親であるが、鱗形屋本では再び母は慳貪で驕慢心強い人となる。そして、母が落ち、目連と再会する場所が女人の地獄として有名である血の池地獄となった。つまり、目連の母の墮地獄の理由に、「女人」であることが加わったのである。『血盆経』信仰や、先の立山曼荼羅、『箱根権現縁起絵巻』などの例と合わせて今後考えたい課題である。

また、近世末から明治にかけて多数出版された『目連尊者地獄めぐり』という盆踊り歌がある。今回、蓬左文庫蔵文久元年(1861)、国立国会図書館蔵文化四年(1807)刊本など諸本の中で比較的古い本を調査し、さらに明治期の諸本と読み合わせた。近年、北陸地方に残る諸本についての研究がなされ始めたが、これらとは内容に差がある。二系統あったことは明らかだが、『もくれんのさうし』における転換以後の展開と『目連尊者地獄めぐり』との関係性を探るべく、詳細な内容の読解が必要となる。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

なし